

ASD 精査目的で行われた WAIS と PARS との関連

○松浦可苗¹・濱谷沙世²・武田知也³・中瀧理仁³(非会員)・大森哲郎³(非会員)

(¹徳島大学病院精神科神経科・心身症科, ²千葉大学子どものこころの発達教育センター, ³徳島大学大学院医歯薬学研究部精神医学分野)

キーワード: 自閉性スペクトラム障害, WAIS, PARS

Relationship between WAIS and PARS in patients with ASD suspect

Kanae MATSUURA¹, Sayo HAMATANI², Tomoya TAKEDA³, Masahito NAKATAKI³, Tetsuro OHMORI³

(¹Department of psychiatry, The Tokushima University Hospital, ²Research Center for Child Mental Development Chiba University, ³Departments of psychiatry, Institute of Biomedical Sciences, Tokushima university Graduate School)

Key Words: Autism Spectrum Disorder, WAIS, PARS

目的

自閉性スペクトラム障害 (Autism Spectrum Disorder; 以下 ASD) は, 社会的コミュニケーションの欠陥, 行動・興味・または活動の限定された反復的な行動様式などの特徴をもつ疾患である。近年, 精神科において ASD などの発達障害の精査を目的とした受診が増加している。その際に実施されることが多いのが Wechsler 式知能検査である。

ASD の認知的な特徴を明らかにするため, Wechsler 式知能検査のプロフィール分析が行われてきた (金井 et al., 2012; 小山・栗田, 2008; Ota, 1987)。その結果, 『数唱』『積木模様』が高く, 『理解』が低いなどといった, ASD に典型的なプロフィールも提唱されているが, 平均的知能以上の高機能 ASD では一定のプロフィールを見出すことはできないとも言われており (黒田, 2014), 一般的にはプロフィールは鑑別診断の決定的証拠にはならないと言われている (藤田 et al., 2011)。

そのため, Wechsler 式知能検査と共に, ASD 傾向を測定する検査が実施されることが多い。そのような検査の一つが, 親面接式自閉スペクトラム症評定尺度 テキスト改訂版

(Parent-interview ASD Rating Scale-Text Revision; 以下 PARS-TR) である。PARS-TR は, 幼児期から成人期のいずれの年齢段階にも対応可能で, あらゆる認知発達水準の広汎性発達障害 (PDD) 者の行動をとらえ得る (神尾 et al., 2006) と言われている。

これら 2 つの検査は同時に実施されることが多いにも関わらず, その関連はまだまだ明らかになっていない。実際, WAIS-3 と ASD 傾向を測定する自記式の質問紙である Autism-Spectrum Quotient (AQ) との関連を調べた研究では, WAIS-3 と AQ の結果には一部で乖離があり, 解釈は慎重に行われるべきであるとされており (武田 et al., 2015), 他者評定式の検査である PARS-TR と WAIS との間にも乖離が見られる可能性がある。そこで本研究では, Wechsler 式知能検査のうち, 成人に実施される WAIS-3 と PARS-TR の関連を調べ, 実際に知能検査が ASD 傾向とどれほど関連しているのかを検討する。

方法

対象者: 2008 年から 2017 年 3 月に徳島大学精神科神経科を受診し, WAIS-3 と PARS-TR が施行された者のうち, 研究への参加同意が得られた 18 名 (男性 10 名, 女性 8 名) であった。

心理検査: いずれの検査も病院内の心理士が実施した。1. PARS-TR: 幼児期, 児童期, 思春期・成人期の 3 つの尺度に分かれており, 思春期・成人期にあたる者を評定する場合には, 57 項目に回答する。項目 1~34 までは幼児期の症状が最も顕著な時について回顧的に評価し (幼児期ピーク得点), 項目 25~57 までは現在の様子について評価する (現在得点)。2. WAIS-3: 14 の下位検査からなる知能検査であり, 総体的能力である全検査 IQ のほかに言語性 IQ・動作性 IQ の算出が可

能である。補助検査である組合せの得点は今回の分析には使用しなかった。

倫理的配慮: 本研究は徳島大学臨床研究倫理審査委員会の承認を得て実施された。

結果

18 名の平均年齢および平均得点を Table1 に, WAIS-3 と PARS-TR の相関を Table2 に示した。

考察

今までに先行研究で ASD との関連が指摘されていた『数唱』と, 幼児期ピーク得点の間に正の相関が見られており, ASD 特徴をもつ者は機械的な記憶が得意であるということが示唆された。一方で, 今まで先行研究で指摘のなかった『記号探し』と, 幼児期ピーク得点が正の相関を示していた。これは, 今回の被検者の中に最終診断が統合失調症や双極性障害となった者がいたことが影響している可能性が高い。これらの人々は PARS-TR の得点が低く, 運動機能の低下や注意集中の困難さなどによって『記号探し』の得点も低くなりやすいため, その影響を受けて正の相関が生じたと考えられる。また, 今回の研究においても, ASD との関連が指摘されているプロフィールと PARS-TR との間には一部のみには相関がなく, 知能検査の結果のみで ASD の診断をすることは難しいことが示唆された。

今回の研究の問題点として, 被験者が不均一であることが挙げられる。今後は検査の結果 ASD であると診断を受けた者に対象を絞り, 人数を増やして研究を行う必要がある。

Table1 被検者の平均値

	Table1 被検者の平均値	
	平均値	標準偏差
年齢	26.11	7.42
WAIS-III		
全検査IQ	88.61	17.91
言語性IQ	93.06	18.09
動作性IQ	85.22	16.90
言語理解	94.89	17.39
知覚統合	85.72	18.07
作動記憶	91.22	21.23
処理速度	89.83	16.56
単語	9.94	3.37
類似	8.89	3.53
知識	8.50	3.50
理解	8.22	3.54
絵画完成	5.94	2.55
積木模様	7.89	4.31
行列推理	9.11	3.55
絵画配列	7.56	3.31
算数	8.61	3.01
数唱	9.78	3.67
語音整列	8.11	4.44
符号	8.50	3.37
記号探し	7.89	3.34
PARS-TR		
幼児期ピーク	6.11	6.24
現在	10.333	7.90

Table2 WAIS-3 と PARS-TR の相関

	Table2 WAIS-3 と PARS-TR の相関	
	PARS-TR	
	幼児期ピーク	現在
WAIS-III		
全検査IQ	.223	-.240
言語性IQ	.166	-.325
動作性IQ	.159	-.072
言語理解	.078	-.417
知覚統合	.067	-.172
作動記憶	.414	-.086
処理速度	.644**	.173
単語	.072	-.468
類似	.127	-.423
知識	.200	-.137
理解	.060	-.345
絵画完成	-.005	.017
積木模様	.135	.002
行列推理	.032	-.432
絵画配列	-.135	-.182
算数	.309	-.210
数唱	.590**	.101
語音整列	.245	-.180
符号	.397	-.023
記号探し	.800**	.347